

1年2組

はっけん、たんけん、自然体験園 ～日々の遊びから感じる「いのち」～



自然体験園がぼくらの遊び場だ

生活科の時間になると教室前に広がる自然体験園に出かけて活動しています。

春の自然体験園には、たくさんの花が咲いています。白、青、赤、ピンクに黄。どれもきれいです。ある子は、彩りを考えながら花束にしてその美しさを楽しんでいます。またある子は、母へのプレゼントにしようと母の好きな色の花を集めています。なんとも微笑ましい姿に、こちら思わずにっこりしてしまいました。

園の中心に広がる大池では、必死に眼を凝らし水面をのぞき込む男の子がいます。生きものを探しているのです。この日は、ドジョウがいるらしいとの情報が入っていました。息を潜め、静かに歩み寄る姿を見るとついこちらも熱が入ります。よし、がんばれ！！

大池の上の岩山では、何やら建造物が出現しています。秘密基地です。あり合わせの材料で作られた急ごしらえですが、しっかり屋根らしきものまであります。きっとここなら、何時間でも過ごしていただける。子どもたちにとって特別な場所になるのでしょうか。

生活科という限られた時間ではありますが、自然体験園での遊びは、子どもたちに様々なことをもたらし続けています。教科書に書かれた知識ももちろん大切ですが、ここでしか学ぶことのできないことがきっとたくさんあるのです。これからもこの遊び場で、たくさんの活動を通し、たくさんのことを学んでいってほしいと思います。



進化する遊び

自然体験園の中心には、大きな池があります。暖かい陽気に誘われ、生活科の時間や休み時間に、多くの子どもたちが池に入って遊ぶ姿が見られるようになってきました。その大きな池で、多くの子が興じているのが生き物探しです。ドジョウ、ザリガニ、メダカ、フナ、アメンボ、タニシ、池には様々な生き物が住みついています。「先生、今日は3匹もドジョウを捕まえたんだ」、「アメンボ5匹も捕まえたよ。すごいでしょ」など、意気揚々と報告してくれます。ところで、このように報告してくれる子どもたちは、はじめからこんなに捕まえるのが上手だったわけではありません。4月の中旬までは、意気込んで池に向かうものの、収穫ゼロの日がほとんどでした。どうしてこんなに上手に生き物を捕まえられるようになったのでしょうか。それは、子どもたち自身が遊びを進化させてきたからです。その進化で重要な役割を占めているのが情報収集です。「○○ちゃんがあそこでザリガニを捕まえたらしい」、「お兄ちゃんは、浅いところで捕まえたんだよ」などといった情報を手がかりに網を構えます。そして、取り方もその情報に合わせて水面だけではなく、泥や石の下といった部分も搜索するようになります。また、上手になれば捕まえた後のことも重要です。自ら図鑑を調べ、飼育のための餌の種類や必要な道具（ブクブク装置）を突き止めていきます。私が「大池の漁師」、「大池のプロ」と尊敬の念を込めて声をかける子がいますが、彼らの池に向かう姿勢は真剣そのものです。なんていい遊びをしているのでしょうか。



大物 発見！！

ついに大物を捕獲です。真っ赤なボディに、大きなハサミ。今まで捕まえてきたものとは比べ物にならないほどのサイズです。「先生、見て見て、ついにやったよ」大きなザリガニを手に乗せて、もう、子どもたちは大興奮です。これまで、毎日のように網を持ち、大池に繰り出していた様子を知っていたので、こちら心からこの出来事を喜びました。

感激もつかの間、次は、飼育の仕方を図鑑で調べます。「砂利が必要だよ。駐車場から取ってこようよ」、「エサは、どうするんだよ」、「小魚を食べるらしい」、「メダカを入れておこうよ」。一匹の大物の捕獲によって、どんどん活動が広がっていきます。子どもたちの行動力に驚かされます。

一方で新たな動きも見られます。先日は、Aさんも網を構え、大池に入っていました。「生き物は苦手なんだ」と今まで一歩引いて見ていた女の子です。恐る恐る池に足を踏み出します。「どうやって取ったらいいの？」救いを求めていると、こうだよと言わんばかりに男の子がやり方を見せてくれます。それを見ていたAさんは、なんとか網で生き物のいる泥をすくおうとするのですがうまくいきません。「もっと前のほうだよ」周りの声に促され、勇気を振り絞ってさっきより大きくすくってみます。そのゆっくりあげた網の中、なんとドジョウが一匹。「とれたあ〜」とびっくりした様子のAさん。こうしてまた今日も一人、大池の魅力に取りつかれていきました。

大池を中心とした自然体験園で命を感じながら過ごす時間は、きっとかけがえのない時間なのだと思います。今、この季節、この時期にしか出合えない命があります。子どもたちには、そのかけがえのない命を肌で感じながら成長して行ってほしいと思います。

